都市部における若者の社会参加と文化活動

——パリ郊外オーベルヴィリエ市の事例を通して——

Public participation and cultural activities of young people in urban areas :
the case of Aubervilliers in a suburban Paris housing development

森 千 香 子
MORI Chikako

This study seeks to clarify how the forms of mobilization of young people have changed in urban deteriorated areas that are the locus of social problems such as youth unemployment or social exclusion, the consequences of post-industrialization and globalization of economy. Analysis of cultural associations composed by young actors in Aubervilliers, a former bastion of the labour movement, indicates that they find in cultural activities not only an economic and professional interest but also a social and collective dimension that cannot be ignored. Cultural activities provide original mechanisms for political expression, reveal new standards of social integration (especially for young people of immigrant origin) and show the way to emerging models of public participation in a political space where abstention has become, as in many industrialized countries, a major problem.

1. はじめに

フランスでは1980年代より「郊外」問題が重要な社会問題として注目を集めてきた。1950年代より大都市郊外に大量建設された社会集合団地の著しい荒廃と、そこに集住する移民の若者の失業や非行が議論の中心となった〔稲葉1998:284〕⁽¹⁾。「郊外」研究にも移民二世か、都市政策を問題化したものが多い〔Jazouli 1992; Vieillard-Baron 1994; Boubeker 2003〕。だが19世紀後半より工業地帯として発達し、高度成長期には北アフリカなどから多くの移民労働者が動員されたが、1970年代以降製造業の大幅な雇用削減により失業が増加し、貧困化が進んだ、という「郊外」の歴史をふまえると、『『郊外』＝脱工業化した工業地帯の問題』という面も無視できない。

脱工業化の影響は「郊外」における雇用だけでなく、住民の社会参加の形態にも波及した。古くから労働者人口の多かった郊外の工業地帯で伝統的に盛んだった労働運動が、脱工業化により急速に衰退したのである。20世紀前半のフランスにおける移民と社会をつなぐ仲介の場として、「労働」と「労働運動」が移民の統合に重要な役割を果たしたと指摘するG. ノワリエルは、失業と雇用の不安定化が深刻化し、労働運動も衰退した現在において重要なのは、「移民の若者に希望を与えるような新しいタイプの『有機的連帯』、新しい『参加』の場を創出することだ」と述べている〔Noiriel 1988:355-356〕。

だが、ノワリエルの言うような新しい「参加」の場とはいったいどのような形で存在しているのか。この観点から、本稿では「郊外」における若者の文化活動に焦点をあてる。具体的には、まず労働運動以降の社会参加の様式を変化の相において検証し、それからパリ郊外オーベルヴィリエ市で活動する5つの若者文化アソシエーションに対して行った調査に基づいて⁽²⁾、若者の文化活動を集合行為の側面から考察していく。

2. 脱工業化以降の集合行為の変容－労働運動から文化アソシエーションへ

調査地のオーベルヴィリエ市は高失業率（22.6%）、学業挫折の高さ（15歳以上の無資格者 33.2%）、若者（15-24歳が全人口の 29.8%）、外国人（29.7%）の割合の高さなどから都市問題地域（Zone Urbaine Sensible）に指定されている典型的な「郊外」の自治体である⁽³⁾。産業革命直後に工業地帯として発展した同市には、20世紀初頭から国内、ヨーロッパ、アフリカ諸国の様々な地域から労働者が次々と移住した。共産党が伝統的に強く、第二次大戦後は共産党が継続して政権についている。

フランスでは1970年代より脱工業化が進み、工業地帯で雇用が削減され、それと並行して組合加入率が低下し、労働運動も衰退していくが、労働運動の基盤の強かったオーベルヴィリエ市では、労働運動の衰退は他の地域よりも遅かった。その反面、1960年代末から注目された環境運動や地域運動などの「新しい社会運動」は同市ではあまり盛り上がりなかった。脱工業化が加速し、労働運動が一層衰退する1980年代になると「ブル運動」と呼ばれる移民の若者運動が発達する。マグレブ出身の移民二世を中心とした移民の若者の間で生まれたこの反人種差別運動は、当時政権にあった社会党にも後押しされて急速に広がり、オーベルヴィリエ市でも多くの若者の支持を集めたが、それも1980年代後半になると一気に下火になった。この頃から若者の失業問題と共に、若者の連帯の不在が指摘されるようになる。学業を挫折し、職もなく、社会参加の場を持たぬ若者の社会排除が問題化されるのである。そして若者の連帯の欠如は、労働社会の解体と個人主義の発達という側面から論じられていく [Mori 2002: 15-19]。

だがこのような社会参加の衰退について、異なる見解を示す研究者もあった。J. イオンによれば、個人主義の発達は社会参加の衰退ではなく、むしろ参加の様式の変化をもたらした。従来の社会参加は、労働運動がそうであったように、同質的な集団への継続的かつ全体的な加入によって実現され、表現行為は「代弁者」を通して行われた。つまり個より集団が重んじられる様式だった。一方、今日の若者の社会参加は単発的、限定的であり、表現行為は「代弁者」ではなく、個人の名において行われ、個人は集団に隠蔽されることなく前面に押し出されるという [Ion 1997]。M. ヴィヴィオルカも、政党、組合などの従来の社会参加の場が直面する困難を認めた上で、それは社会参加というものの自体が衰退したのではなく、新しい社会関係、共生の様式の出現だと主張する。この新しい様式は、従来の社会運動において対立的に考えられてきた「個人」と「集団」、「個人主義の発達」と「集合行為への希求」が矛盾せずに同居している点が特徴である。今日の社会参加は、あるイデオロギーに身も心も捧げるというのではなく、「集合的主張」と「個人の選択」を両立させる点で、今までとは異なっている。私生活を重んじる傾向の見られる今日の若者にとって、社会参加は私生活と両立しうるものでなければならないのである [Wieviorka 1998]。

参加の様式だけでなく、参加の領域にも変化が現れている。F. デュベは困難な現状に抵抗する若者の行為様式が、労働運動などの従来の抵抗とは全く異なると指摘した。若者の行為はまず個人の意志から出発している。また若者たちは労働運動とそのイメージを拒否し、代わりにより文化的な活動を優先する [Dubet 1987: 303-323]。またヴィヴィオルカも新しい参加の様式に関して、集合行為の形成は現状に対し問題提起するような文化的選択によって行われると述べた [Wieviorka 2000: 156]。このように労働運動からより文化的な行為へと参加の領域の変化が観察されている。

このような労働運動から文化的行為へという参加の様式の移り変わりは、オーベルヴィリエ市で廃業した工場が文化アソシエーションの施設として再利用されている例にも見てとれる。たとえば1997年設立のLes Laboratoires d'Aubervilliersは、演出家のF・ヴェレが地元の若者で行う文化・芸術活動のアソシエーションであるが、彼らが施設として使っているのは閉鎖されたタイヤ工場である。また元ルノーの部品工場が芸術家のアトリエと劇場、サイバースペースを合体させた総合文化施設に改装された例をはじめ、地元の若者による音楽活動のアソシエーションL'Usine Liquide、展覧会などの文化イベントを開催すると同時に若者たちを対象に無料で絵画の手ほどきをするL'art gratuit、社会問題に関わるテーマを扱う演劇集団Irheaなど、文化関係のアソシエーションが工場を施設としている例は数多い⁽⁴⁾。これは労働運動の発達から文化活動の活性化という変化を象徴する点で重要だろう。かつて労働運動の牙城であり、現在は文化アソシエーションが急速に増加する同市の事例は、脱工業化以降の参加様式の変化をめぐって、文化活動が提起する問題をはっきりと表出する点で有効である。もちろん、若者の文化活動の実態は多様であり、文化アソシエーションにおける文化活動はその一部に過ぎず、それが本稿の限界でもある。だが集合行為の様式として文化活動を検証する本稿において、文化アソシエーションを分析の対象とすることは、アソシエーションの集合的な側面を考えればより効果的と思われる。

3. 文化活動の経済的・社会的争点

(1) 若者による文化アソシエーションの形態

オーベルヴィリエ市では文化アソシエーションの増加が近年著しく⁽⁵⁾、2001年に新設されたアソシエーション66のうち37が文化アソシエーションだった。そのうち17が若者を対象とするか、25歳以下の若者自身によって結成されている⁽⁶⁾。

このようにオーベルヴィリエ市には多数の文化アソシエーションがあるが、本稿は若者の新しい社会参加の様式として文化アソシエーションに論点を設定している。そのため、50年前から市が運営する「オーベルヴィリエの若者の家」や、その他の同様の組織のように、「大人」が「青少年」を対象に運営するタイプの従来型の文化アソシエーションは対象から外した。一方、アソシエーションは結成の際には届けを出す義務があるが、解体の際に届けは要らないため、名前は存在しても事実上解体しているものも少なくない。この傾向は若者によって結成されたアソシエーションによりはっきり見られ、1997年に25歳以下の若者が結成したアソシエーション18に対して調査したところ、そのうちの10が活動停止、6は連絡先不明で、活動を継続しているのは2つだけだった。

こうした事情をふまえ、本稿で扱う文化アソシエーションは次の基準から選んだ。第一に（結成時点で）25歳以下の若者が結成していること、第二に過去10年以内に結成された比較的新しい文化アソシエーションであること、第三に継続的に活動をしていること（5年以上の活動歴）、第四に活動に広がりが見られること（活動回数、加入者の増加）である。以下では、これら4つの条件を満たした文化アソシエーション5つとその文化アクターの事例に基づいて論じる⁽⁷⁾。

ケルトゥム（女性27歳）の両親はモロッコから移住してきた。「既存のアソシエーションにはやりたい活動が見つからなかった」ため、友達4人とダンスのアソシエーションIndans'citéを結成。団地の中でダンス活動を広めたいという願いを込めて、アソシエー

ション名に「dans(e)=ダンス」と「dans (la) cité =団地の中」という単語を用いた。そのうち就職などで友達に辞めてしまい、ケルトゥムだけが残った。昨年まではパリ市内の洋服店で働きながら活動が続けていたが、会員数が増えたため今年からアソシエーション専業になった。現在は地元の団地だけではなく、外部からも参加者が増えている。

マイク（男性 26 歳）は海外県グアドゥループ出身で、2 歳の時からオーベルヴィリエの団地に住んでいる。ラッパーを目指して活動していたが、若者に中々演奏の場がないことを実感。5 年前に団地の音楽仲間と COMAA を結成し、若手ミュージシャンの演奏の場を探す一方、団地内で若者を対象にヒップホップ教室を開いている。

サラト（男性 24 歳）は 14 歳の時、難民としてスリランカからやってきた。ダンスに熱中していたが、練習する場所がないことに不満を持ち、同じスリランカ出身の仲間と L'Avenir est à moi を結成。現在はパリのレストランで働きながら、活動が続けている。オリエンタルダンスの要素を取り入れたヒップホップの踊り手として舞台に立つため、仲間と練習する傍ら、地元の若者に対するダンスの指導にも取り組んでいる。

ファリド（男性 29 歳）はアルジェリア人の両親を持つ。兄弟が入っていたので「何となく」加入したアソシエーション OMJA で初めてビデオカメラに触れたのをきっかけにビデオに関心を持ち、専門の研修を受ける。6 年前に Les Engraineurs を結成し、小学校と協同で教育ビデオをつくる一方、地元をテーマにしたドキュメンタリーの制作に取り組む。

ジュッド（男性 26 歳）はハイチから 6 歳の時にフランスに来た。職業高校を中退した 16 歳の時に演劇に出会った彼は「演劇に救われた」と言う。5 年前に仲間と劇団 Irhea を結成。現在も市の体育館で監視員として働きながら、社会派の演劇活動を行う。

これらの文化アクターへのインタビューとアソシエーションでの参与観察をもとに、彼らの文化活動に見られる論理を以下で検証する。

（２）「文化的」と「経済的」の接点－職業という地平

まず若者たちに共通して見られるのは「職業的次元」である。これは彼らがすでに社会人としての経験を持ち（ケルトゥム、サラト、ジュッド）、職業世界と接触があるというだけではない。重要なのは、彼らがアソシエーションでの文化活動を趣味や余暇の楽しみとしてではなく、職業（あるいは職業にしたい）として位置づけている点である。具体的な目標としては、プロとしての活動を目指す者と、指導者としての活動を目指す者に分かれるが、文化活動を通じて生計を立てようという意欲はどちらの場合にも共通する。

文化活動を通じて職を見つけるという発想は、市が運営するアソシエーションをはじめとする従来型アソシエーションにはなかった。それまで市が奨励してきた文化活動には、労働者の余暇の気分転換、あるいは若者の教育という要素が強く、文化活動を通じてプロ、または指導員などの職を見つけるということは想定されていなかったのである。

だが 25 歳以下の 3 人に 1 人という高失業率⁽⁸⁾を記録する同市の若者にとって、職を得ることは極めて切実な問題である。こうした若者たちの困難を考慮すれば、若者がアソシエーションを単なる文化活動の場としてではなく、生計を立てる手段として捉えるのはごく当然だろう。文化活動を自分の職業にしようという目標を持った若者たちには、計画的で自己投資を惜しまないという特徴が見られる。たとえばマイクは、アソシエーション結成前の二年間、通信教育と企業への研修を通して「マネージメントを学んだ」。またサラ

トはプロのダンサーを目指しているが、「失敗した時に備えて」文化活動指導員の資格取得の準備も並行して行っている。

ここで問題になるのは「職業的・経済的次元」を孕む若者の文化活動が、アソシエーション法の枠組内でどこまで認められるかだろう。フランスのアソシエーション法（1901年法）はアソシエーションの活動を「非営利目的であること」と定める一方、「非営利目的の成就に必要な手段である限り」においてアソシエーションの営利活動を認めている[コバヤシ 2003:303]。だが「非営利目的の成就に必要な」かどうかの境界はきわめて定義が難しく、アソシエーションなのか、「仮面アソシエーション」なのか判断しにくいものもある⁽⁹⁾。

いずれにしても、今日の若者の文化アソシエーション活動を検証する際に「職業的・経済的次元」は見逃せない要素である。だがそれを消費社会や新自由主義の影響にのみ集約するのはいささか早急だろう[Peralva 1998:452]。この経済的側面はそれ自体で完結するのではなく、若者の認知されたい、評価されたいという欲求でもある。自らの文化活動に含まれる「経済的価値」に対する若者の意識を、彼らのおかれた経済状況と切り離して考えることはできない。若者の失業が増大した今日、アソシエーション活動が雇用を創出するという可能性、つまりアソシエーションの経済的次元は極めて重要になっている。こうした状況の中、若者にとってアソシエーションでの文化活動は、失業などの現実の苦痛を一時的に和らげる「気晴らし」ではなく、個人の目標実現のための「手段」なのである。

（３）「文化的」と「社会的」の接点—個人の経験と集団への参加

だが経済的目的を持ったこのような文化活動は、最終的に「私益追求」に、個人主義に陥ってしまうのだろうか。あるいは、個人的目的とアソシエーション活動の基盤である連帯は、必ずしも矛盾せずに同居し得るのか。個人的動機で始めた文化活動が集合性を帯びるとすれば、それはどのような条件において可能になるのか。

若者がアソシエーションを結成するのは「場所がない」というきわめてシンプルで物質的な問題に端を発している場合が多い。

「ダンスが好きで毎日練習しようとしたが、とにかく練習の場所がない……仕方なく団地の中庭で練習していたんだけど、困っていた。市の体育館などを使いたくても、個人だと貸してもらえない。」
(サラト)

「音楽を始める者は多いけど、たいい演奏する場所や機材がなくてそのうち辞めていく。」(マイク)

「たしかに市のアソシエーションには『若者向けの文化プログラム』がたくさん組まれている。でも実際は似たようなものがほとんど。ヒップホップとか男の子向きのものばかりで、女の子には選択の余地も居場所もほとんどなかった」(ケルトゥム)

だが団地に特有とも言えるこの「場所の要求」は、単なる空間としての場所探しにはとどまらない。同様の困難を抱える地域の若者に何かを伝えたい、共有したいという感情が、集団に、共同体に、社会に属したいという意識につながっていく。

「(別のアソシエーションで) ビデオの操作を覚えて以来ビデオに夢中になって、今の自分がある。自分が覚えたことを次の世代に教えたい」(ファリッド)

「若者に明日にでもスターになれるぞと思込ませるためではない。目的は共有する経験という連帯感を地域に作り出すこと」(マイク)

「文化活動を通して探し求めるのは、自分のアイデンティティを再定義すること。でも同時にひとつの集団、共同体に関わることでもある。集合的なものに関与したいという気持はとても強い」
(ケルトゥム)

ゴーシェは、個人主義が著しく発達した現代における集団からの個人の「脱退」の進行と、それに代わる個人的アイデンティティの要求の顕在化に注目し、それを「超現代の個人主義」と表現した [Gauchet 2002]。だがここで見てきた若者文化アソシエーションにおける個人的動機と連帯意識の連結は、個人主義の進行が必ずしもゴーシェの言うような集団の解体に行き着くわけではなく、集合行為の新しい様式を提示しうることを表している。

他人と何かを共有したい、集団に関与したいという感情が生まれた時に、文化活動は単なる個人的な活動ではなくなる。そうすると、若者たちが文化活動に取り組むのはもはや自己実現のためだけではなく、自分の経験から生まれた連帯への要求を表現するためもある。そしてこの個人的体験に基づいた集合的要求にこそ「文化的」と「社会的」の接点が存在する。つまり、当初の個人的動機が「個」の枠組みを超え「集団」に入った時点で、若者の文化活動は社会性を帯びるのである。

ここで重要なのは「自己実現のための活動」と「集合行為」は決して矛盾しないという点である。たとえば「自分と仲間のために舞台を探す」という個人的動機から生まれた COMAA の本部は団地の一階にあるが、そこが今では音楽好きな地元の若者の情報交換の場になっている。Indans'cité や L'Avenir est à moi も、初めは自分たちの住む団地内で活動していたが、活動が徐々に外に開かれ、現在では団地外からの参加者が増えているという。これらの文化アソシエーションは個人の実現と集合行為を共存させるのである。

4. 文化活動とその「政治性」

(1) 政治制度との関係

だが若者たちの文化活動がこのような集合的要求を孕んでいるとはいえ、それは公共空間においてどう表出されるのだろうか。あるいは、文化を通じた集合行為は既存の政治制度とどう関わり得るのか。ここでは自治体における「若者問題」の実態と、それに対する解決策として若者の文化活動が注目される背景を検証した後、既存の政治制度に対する若者の反応について見ていく。

オーベルヴィリエ市では 1990 年代から、若者を地域社会にどう統合するかが重要な政治課題となった。「若者の政治離れ」はフランス社会全体に見られる現象と言われるが⁽¹⁰⁾、この傾向は「郊外」でより顕著に現れ、オーベルヴィリエ市の団地地区の 25 歳以下の棄権率は 60% を超える [Thévenin 1996; Bacqué, Sintomer 2002]。

こうした文脈において若者の文化活動は、自治体と若者を結ぶ仲介の場として関心を集めるようになる。予算は市の助成金だが、一定の自律性をもって運営されてきた「オーベルヴィリエの若者の家」代表に、2001 年社会党の市議会議員が就任したことは、その関心を示す一例に過ぎない。以降、同団体を介して、地域の若者文化アソシエーションと市の連携の強化や、学校休暇中の文化事業の開催、助成金の交付の増加など、自治体は若者文化活動に積極的に介入するようになり、若者文化活動の支援が政策として実施されている。若者の文化活動は、オーベルヴィリエ市の「多文化性」を象徴する肯定的な要素であり、これは「郊外」の否定的なイメージに悩む若者に誇りを与え、また彼らの社会化に貢

献するものだと位置づけられた⁽¹¹⁾。

だが、若者の文化活動を既存の政治制度に組み入れようとする自治体の意向に対し、若者は強い反発を示す。たとえば「若者の政治離れ」をめぐる言説についても、若者は異なった見解を表明する。

「政治家たちはいつも安易なステレオタイプを繰り返すだけなんだ。郊外の若者たちはナイキやアディダスに夢中で、政治意識に欠けてるってね。(中略) たしかに前の世代みたいな政治文化はここにはないかもしれないが、それと今日の若者に政治意識がないというのは別の話だ。」(フェリド)

若者たちは「棄権率の高さ＝政治への無関心」という公式を否定し、自分たちが投票に行かないのは既存の政党のやり方、特に 1980 年代に移民二世の若者運動を支持しながらも、彼らの社会的困難を改善できなかった左翼政党の「裏切り」に原因があると批判する。

「左翼は何もしてくれなかった……社会運動を利用して、若者の移民運動を選挙に利用した以外は。だから今の若者たちは『政治』と聞くだけで警戒するんだ。政党の言う甘い話を信じてはことごとく約束を破られてきた上の世代と同じように、俺たちもだまされるんじゃないかってね。(中略) だからといって彼らが政治的なものに無関心がないわけではないんだ。だまされるんじゃないか、裏切られるんじゃないかという警戒心が強いんだ。」(マイク)

「選挙の時だけ声を掛けられて、利用されて、選挙が終わってから次の選挙が始まるまでの間は忘れ去れるのは、まっぴらだ。長いこと政権に就きながら結局状況を変えようとししない左翼政権に票を投じるのは、まっぴらだ。」(ジュード)

政党に「利用される」のではないかという強迫観念は、既存の政治制度に対する激しい拒絶となって現れるだけではない。既存の政党に働きかける形で存在してきた従来の社会運動に対しても、若者たちは距離をとる。

「政治制度に働きかけるということは、買収されるか、無視されるかのどちらかに結局陥ってしまう」(ケルトゥム)

これらの発言からわかるように、若者たちは政治制度に対して強い反発を示す。それは政治空間に自分たちの声が反映されないことへの失望であり、「騙されるのではないか」という警戒心でもある。ミュッチエリは、1980 年代以降に現れた「ブル運動」を始めとする移民の若者の運動や集合行為に対して、政治家が十分な形で応じなかったことが、若者に政治不信感を植えつけたと指摘した。重要なのはこの不信感は政治に対してだけでなく、社会運動や抗議活動をする団体にまで向けられ、これらにも若者たちは歩み寄ろうとしないことから、若者による社会運動の実現は困難になっているという [Mucchielli 2001:118-122]。ラペロニーも、郊外における集合行為の存在は認めながらも、その基盤の脆弱さを指摘する。1980 年代に郊外で発達した移民運動などの「社会参加」の様式は若者の実際のニーズに対応できず、結局は若者に「説教じみたもの」という印象しか与えなかったことから、一部の若者は政治や社会運動に対して却って強い拒否反応を示すようになった [Lapeyronnie 1997:325-326]。

だがその一方で、若者自身も強調するように、彼らは非政治的なわけではない。それは既存の政治制度に対する彼らの激しい批判からも理解できる。イオンによれば、かつては「労働運動への参加＝組合への加入」、「政治への関心＝投票」とされていたが、今日はこのような図式が成り立たなくなった。つまり組織に加入していなくても運動には参加でき

るし、同様に選挙の棄権は必ずしも「脱政治化」を意味しない [Ion 2001:28]。そう考えると、個より集団が重んじられ、均質化された集団の代弁者を通して行われる従来の代表制政治に若者が背を向けるのは、政治に対する無関心というより、むしろ新しい参加の様式の要請だと解釈できるのではないか。

（２）新しい表現の場としての文化活動－「言葉を取りもどす」

だが、社会運動にも政治運動にもすぐに結びつかない若者の文化活動が表現するのはいったい何なのか。既存の政治制度とも、従来の社会運動とも距離をおく若者の文化活動にも何らかの形で「政治性」があるとすれば、それは具体的にどう表現されるのか。

「ダンスを通じて自分を表現することは、何よりもまず自己解放の手段だ。」(サラト)

「初めは特に社会的貢献などは意識してなかった……ただ文化をこの団地に取りもどそうと思って活動を始めただけ。自分たちと地域の人たちを解放するための文化活動を。」(ケルトゥム)

ここで強調されるのは、文化表現が何よりもまず「解放」の手段だという点である。だが、それは何からの「解放」を指しているのか。また、その「解放」は具体的に何を表現することで実現されるのか。

「ジャーナリストは（僕たちの暮らす）郊外のネガティブなイメージばかり流す。学校内の暴力とか、麻薬の売人、犯罪……この手の報道を見た視聴者はそれを鵜呑みにして、それが郊外の現実だと思い込むから、あそこはゲットーだとかひどく悪い印象ばかり持っている。最悪なのは、ここで暮らす若者たちが、自分たちの地域が否定的に報道されるのをテレビで見てそれを内面化すること。そうだ、俺らはゲットーに住んでいるんだ、それならもっとスゴイことをやってやれと。でもここにはテレビで報道されるようなことばかりじゃない、もっと違うものがたくさんあるんだ。だから、この地域の本当の現実を外の世界の人に知ってもらうために、ここの住民と協力して、メディアで報道される歪んだイメージとは違う、自分たちが経験する日常の様子を映すドキュメンタリーフィルムを将来的に作りたい。」(ファリド)

「（音楽は）自分を表現し、他の人たちにここで実際に起きていること、社会で自分が日常的に経験していることを伝えるための手段。普通に話すより（音楽を通したほうが）若者には効果的に伝わると思う。」(マイク)

「（この地域で）マリファナを売ってた奴が捕まったりすると、すぐ『ああ、また移民の若者だ、外国人がフランスの治安を悪化させてるんだ』とメディアは言う……でも、『移民の若者』の親がフランスにやってきて、建設現場で働いて、フランスの復興に大きく貢献したにもかかわらず、悲惨な暮らしをしてるってこと、これはメディアでは全然報道されない……僕が演劇を始めたのは、僕らの親たちの叫び、苦しみを表現し、メディアでは語られることのない現実を証言したかったから。」(ジュッド)

これらの若者の言葉に通底するのは以下の二点である。一つ目は自分たちに課された「スティグマ」の問題である。それは自分の暮らす空間に関わる場合（郊外についての否定的な報道）もあれば、自分たちの存在自体に関わる場合（「移民の若者」に対する差別、非難）もある。二つ目は自分たちを取り巻く社会的・経済的困難である。それは失業であり、人種差別であり、自分の親たちの悲惨な暮らしである。さらに彼らは自分たちの抱える問題が社会で理解されていないこと（たとえば、親の世代の悲惨な状況がメディアで全く報道されないこと）を批判する。

ヴィヴィオルカは、自己のおかれた現状を把握し、自らの存在を捉えなおすことから主体的な行動が形成され、「社会から課された否定的なイメージに甘んじることなく、環境を変えようという行動への要求」が生まれるという [Wieviorka 2000:200]。自分たちが

日常的に経験する不平等、困難、矛盾がまず認識され、それを外の世界に向けて発信したいという要求が生まれるが、それではいったいどのような手段を用いてこれらの現実を表現するのが問題になる。これらの要求は、政治制度やメディアが自分たちの声を反映していないとの意識に起因しているため、異議申し立ての手段はもちろん、メディアや政治制度ではありえない。その一方で若者たちは、一人一人の差異を同質的な一集団に還元して発言する「代弁者」の存在も強く拒否する。

メディアでも政治空間でも「語られる」存在に甘んじていた「郊外」の若者は、自分たちの日常と経験を外に発信し、支配的なシステムを批判し、自分たちの声を社会に響かせる手段を持たなかった。こうした文脈で彼らが選択するのが、オルタナティブな表現手段として文化活動なのである。代弁され続けるという悪循環を乗り越えるものとして提示される文化表現とは、それまで公共空間において発言回路を持たなかった若者の新しい表現手段であり、まさにブルデューの言う「自分で自分のスポークスマンになり、語られる代わりに自分で語る」[Bourdieu 1980:18] 手段なのである。文化表現は若者にとって、自立の表現であり、抵抗であり、証言する行為である。これらの文化活動を通して表現されるのは単なるイデオロギーの主張ではない。これらの文化表現は、彼らの所有する唯一の言葉なのである。つまりこれらの文化活動が含む政治性とは、まず自分たちの主張と批判の言葉という唯一の武器を「取りもどす」ことに他ならない。

5. おわりに

本稿は、脱工業化やグローバル化などの社会変動の結果として労働運動が衰退したフランスの大都市郊外における、多くが移民出身である若者たちの新しい社会参加の様式、そして集合行為の可能性という観点から、若者の文化活動を検証し、それが公共空間において持ち得る意味とその集合性、また政治制度との関係について、オーベルヴィリエ市の事例に基づいて考察した。

これらの文化活動は、一見きわめて個人的な活動として映るものの、実際には決して個人の枠組みにとどまるものではなく、集団としての主張など連帯の要素を十分に備えている。文化活動はまた、若者と自治体を結ぶ「仲介の場」として政治空間において期待を集めているが、これらの文化アクターの目的は既存の政治枠組とは違う空間で自ら「語る」という「言葉を取りもどす」作業に他ならない。そう考えれば、既存の制度に対するオルタナティブとしての文化を「制度化」しようという自治体の試みが困難に突き当たるのはごく当然だと思われる。

だが「自分の言葉を取りもどす」、「(それまで耳を傾けられてこなかった) 自分の周りの現実を表現する」という行為が、「現状を変えたい」という強い要求に基づいていることを考えれば、既存の制度との関わりを拒否することは本来の目的と反対に進むことでもある。なぜなら制度からの断絶は、排除されることでもあり、排除された状態では社会に自分たちの声を響かせることが極めて難しいからである。このような矛盾に突き当たった文化アクターたちにとって、いかに自立を保ちながら制度と関わるかが課題になる。

一方、自治体にとって若者の文化活動は、数々の困難や障害にもかかわらず、頼みの綱であることは間違いない。新自由主義政策のもたらした二重社会において失業の増大や雇用の不安定化が進み、こうして社会排除された若者たちが過激化して暴力行為に走ったり、「原理主義」⁽¹²⁾に加担したりするのではないかという「若者の脅威」が心配される中、こ

これらの文化活動は若者と自治体を結ぶ「仲介の場」としてだけでなく、若者の暴力などを未然に防ぐという「リスク管理」の視点からも注目を集めている⁽¹³⁾。仲介として、リスク管理として、若者の文化活動への政治的介入がより一層増える中、文化アクターである若者たちは行政の道具と化すことも、排除されることもなく、社会に働きかけていくことができるだろうか。言い換えれば、若者の文化活動を通して、制度への同化にも制度からの排除にも陥らない、新しい市民の政治的回路の創出するのは可能だろうか。可能なら、いったいどのような条件で可能になるのか。これらの問いは筆者の今後の課題でもある。

本稿の考察はオーベルヴィリエ市の事例に範囲が限られているが、本稿の問題意識は同市の状況に固有のものではなく、フランスの大都市郊外の状況に通底する部分も多いと思われる、今後は問題をより広い枠組で設定し、検証することを目指したい。

註

- (1) フランスの都市郊外すべてがこのような状況にあるわけではなく、たとえばパリ郊外にもヴェルサイユ市、ヌイイ市などの裕福な自治体も例外的に存在する。これらと、フランス社会で問題化される郊外を区別するため、本稿では一貫して「郊外」と括弧に入れた。
- (2) この調査は筆者により 2001 年 11 月から 2002 年 6 月までオーベルヴィリエ市で、若者の文化アソシエーションとその参加者、同市のアソシエーション支援課、若者社会編入課に対して行われた [Mori 2002]。明記した以外に同市の若者社会編入課、アソシエーション支援課作成の資料、配布物も参照した。
- (3) 国立統計経済研究所 (INSEE) による数値。 *Recensement général de la population en 1999*, INSEE. これらの数値は自治体全体の平均であるが、住民の 6 割以上が居住する団地地区では失業率が 50% を超えるなど、社会・経済的困難はさらに深刻である。
- (4) この現象は、脱工業化によって多くの工場が閉鎖したオーベルヴィリエ市が、街の再活性化を目指し、閉鎖した工場を積極的に文化団体や芸術家に提供するという政策と (*Aubervilliers à la page*, no. 8, 《Les cultures et l'égalité》, Aubervilliers, Observatoire de la société locale, 2001)、パリ市周辺の放棄された工場の破壊に反対し、それらの文化・芸術施設としての再利用するよう自治体や政府に働きかけている団体 Usines Éphémères の活動の成果によるところが大きい。
- (5) アソシエーション法は「文化団体」などの下位カテゴリーを定めていない。そのためここでは、①団体名あるいは活動内容に「文化活動」と明確に規定している団体と、②文化以外の活動も行うが、国家の発行する「指導員」の免許の保持者がメンバーに含まれている団体、の二点を基準に分類した。
- (6) アソシエーション関係の数値はオーベルヴィリエ市役所アソシエーション支援課の協力による。
- (7) ブルデュの指摘するように「若者」という言葉は具体的な実体を指すのではなく、時代や社会の文脈によって形成される社会的構築物である [Bourdieu 1980:143-154]。現在、フランス国立統計経済研究所 (INSEE) は 25 歳までを「若者」と分類している。だが学生生活の延長、青年層の就職難、晩婚化が見られる今日、「若者」という分類は過去に比べ拡大しつつあり、教育若者省の外郭団体 DEFI Jeunes では 15 歳から 30 歳を若者と定義している。本調査では後者の例にならい 30 歳までを「若者」とした。
- (8) 2002 年 3 月時点で 25-49 歳の失業率が 8.5% に対し、25 歳以下の失業率は 22% と二倍以上多い。オーベルヴィリエ市では 25 歳以下の失業率は 31% にも達する。Notes de conjoncture 2003, INSEE.
- (9) カルテンバック (Kaltenbach 1995) は、税制面の優遇措置を利用するためアソシエーションの体裁をとりつつ、実は企業同然の営利活動を行うアソシエーションを「目的なき営利団体」(Associations lucratives sans but) と呼んだ。さらに彼はアソシエーション補助金運用の不透明性、政治家によるアソシエーションの道具化、またボランティア精神、自由、無償、透明性など従来のアソシエーション的価値観の喪失を批判した。
- (10) 2002 年 4 月の大統領選挙第一回投票では全体の棄権率 27.8% に対し、25 歳以下の若者の棄権率は 37% を記録した《Ces jeunes qui regrettent de s'être abstenus》in *Le Monde* 2002 年 4 月 25 日付。

- (11) オーベルヴィリエ市社会党サイト参照 <http://www.ps-auber.org/auber/pratiques>.
- (12) ムスリムの多い「郊外」における若者の「『イスラム原理主義』に流れる危険」が、フランスでは1980年代末から、政治空間でもメディアでも盛んに論じられている [Kepel 1987]。だがこのような「イスラム」を「脅威」として捉える論調を批判し、若者の自己形成の側面からイスラムを分析する研究もある [Khosrokhavar 1997; Cesari 1998]。
- (13) オーベルヴィリエ市に隣接するパンタン市では2002年より、若者の非行の増加する7、8月に「若者のエネルギーを違う方向に向けるため」の文化イベントが数多く実施されている。行政によるこのような「リスク管理」は、文化アクターである若者に対し新たな圧力を与えているが、これについては稿を改めて論じることにした。

文献

- Bacqué, Marie-Hélène et Sintomer, Yves 2002 «Affiliations et désaffiliations en banlieue. Réflexions à partir des exemples de Saint-Denis et d'Aubervilliers», *Revue française de sociologie*, no. 42-2.
- Begag, Azouz, Delorme, Christian 1994 *Quartiers sensibles*, Le Seuil.
- Boubeker, Ahmed 2003 *Les Mondes de l'ethnicité*, Balland.
- Bourdieu, Pierre 1980 *Questions de sociologie*, Editions de Minuit. 田原音和（監訳）、『社会学の社会学』、藤原書店 1991.
- Cesari, Jocelyne 1998 *Musulmans et républicains: les jeunes, l'islam et la France*, Complexe.
- Donnat, Olivier 1990 *Les pratiques culturelles des Français, 1973-1989*, La Documentation Française.
- 1998 *Les pratiques culturelles des Français. Enquête 1997*, La Documentation Française.
- Dubet, François 1987 *La galère: les jeunes en survie*, Fayard.
- Gauchet, Marcel 2002 *La démocratie contre elle-même*, Gallimard.
- Ion, Jacques 1997 *La fin des militants*, Editions de l'Atelier.
- Ion, Jacques 1994 «L'évolution des formes de l'engagement public» in Pascal Perrineau (dir.), *L'engagement politique. Déclin ou mutation?*, Presses de la FNSP.
- 稲葉奈々子 1999 「90年代フランスにおける「もうひとつの移民問題」－脱工業社会とアフリカ系移民」 宮島喬編『現代ヨーロッパ社会論－統合のなかの変容と葛藤』人文書院.
- Jazouli, Adil 1992 *Les Années banlieues*, Le Seuil.
- Kaltenbach, Pierre-Patrick 1995 *Associations lucratives sans but*, Denoël.
- Kepel, Gilles 1987 *Les Banlieues de l'Islam: naissance d'une religion en France*, Le Seuil.
- Khosrokhavar, Farad 1997 *L'Islam des jeunes*, Flammarion.
- コリン・コバヤシ編 2003 『市民のアソシエーション－フランス NPO 法 100 年』太田出版.
- Lapeyronnie, Dider 1997 «Autonomie et reconnaissance chez les habitants des quartiers de banlieue» in MIRE (dir.), *Produire les solidarités: la part des associations*, MIRE-Fondation de France.
- Mucchielli, Laurent 2001 *Violences et insécurité. Fantômes et réalités dans le débat français*. La Découverte.
- Mori, Chikako 2002 *Les mutations de l'engagement associatif des jeunes dans les quartiers populaires. Etude sur les associations culturelles pour les jeunes d'Aubervilliers*. Mémoire de DEA, EHESS.
- Noiriel, Gérard 1988 *Le creuset français. Histoire de l'immigration XIX-XXe siècle*, Le Seuil.
- Peralva, Angelina 1998 «Violence urbaine, démocratie et changement culturel», *Cultures et Conflits*, L'Harmattan, n° 29-30, printemps-été.
- Thévenin, Mathieu 1996 *Jeunes et institutions de la jeunesse à Aubervilliers*, Mémoire de DEA, EHESS-ENS.
- Vieillard-Baron, Hervé 1994 *Les banlieues françaises ou le ghetto impossible*, Editions de l'Aube.
- Wieviorka, Michel (dir.) 1998 *Raison et conviction: l'engagement*, Textuel.
- Wieviorka, Michel 2000 *La différence*, Balland.
- Wihtol de Wenden, Catherine et Leveau, Rémy 2001 *La Beurgéoisie. Les trois âges de la vie associative*

issue de l'immigration, CNRS Editions.

行政刊行物

Conseil d'Etat 2000 *Rapport public 2000. Jurisprudence et avis de 1999: les associations et la loi de 1901, cent ans après*, La Documentation Française.

Journal Officiel de la République Française, “Associations: textes législatifs et réglementaires”, Direction des journaux officiels, 1993.

(一橋大学大学院・パリ社会科学高等研究院博士課程)